

日本ヘーゲル学会

第10回研究大会

2009年12月19日(土)

一橋大学
国立西キャンパス

日本ヘーゲル学会 第10回研究大会プログラム

2009年12月19日(土)

於：一橋大学 国立西キャンパス

理事会：職員集会所食堂
発表会場：職員集会所大広間
会員控え室：職員集会所食堂
懇親会：佐野書院

開催校責任者連絡先

島崎隆

電話：042-580-8295 (研究室)

E-mail cs00272@srv.cc.hit-u.ac.jp

住所：〒186-8601 東京都国立市中2-1

【12月19日(土)】

理事会：10時30分～12時

臨時総会：12時30分～45分

個人研究発表：13時～15時20分

13:00～13:45 松岡健一郎 (同志社大学)

「悪無限」の再検討——フィヒテの1811年の知識学を手がかりにして

司会：隈元泰弘 (九州共立大学)

13:45～14:30 石川和宣 (京都大学)

概念の歴史化——「思想の客観性に対する三つの態度」についての考察

司会：牧野広義 (阪南大学)

休憩

14:35～15:20 谷口義治 (滋賀県立大学)

量の基礎づけについて——数学の観点からの検討——

司会：佐野之人 (東亜大学)

休憩：15時20分～15時30分

シンポジウム **ヘーゲルとテイラー**：15時30分～17時55分

司会挨拶：竹島あゆみ(岡山大学)

提題1：中野剛充(千葉大学)

チャールズ・テイラーの承認論

——「ヘーゲルからマルクスへ」から「ポスト9.11時代における“承認と和解”」にむけて——

質問：高田純(札幌大学)

ヘーゲル承認論からする批判的検討

提題2：田中智彦(東京医科歯科大学)

世俗化と近代——チャールズ・テイラーが見るキリスト教世界

——

質問：大河内泰樹(京都産業大学)

ヘーゲル宗教論からする批判的検討

休憩：16時55分-17時05分

全体討論：17時05分-17時55分

懇親会：18時～20時(佐野書院)(一般3,000円、院生2,000円)

以上

個人研究発表

要旨

「悪無限」の再検討

——フィヒテの1811年の知識学を手がかりにして——

松岡健一郎（同志社大学）

本発表は、悪無限について再検討を行うことを狙いとする。その際、フィヒテが1811年の知識学で示した無限性の概念を手がかりにして、まずこの無限性がヘーゲルの「悪無限」に当たるものであることを明らかにしたあと、悪無限としての無限性をもつ意義について考察する。

周知のようにヘーゲルによるフィヒテ批判は、無限性の理解をも問題にしている。ヘーゲルの批判によれば、フィヒテは単に無限進行としての無限性を示し得ただけなので、矛盾を再生産し続けるという原理的限界を克服できていない、ということになる。不完全な無限性理解に対する批判は、ヘーゲルのイェーナ論理学における「悪無限」の概念として結実する。また、ヘーゲルはフィヒテが「時間」の抹消を果たしていない点も問題視している。時間の抹消は、『精神現象学』の「絶対知」でも再度ヘーゲルが論じることになる重要なテーマであり、しかも無限性の理解と分かち難く結びついている。フィヒテもまた彼独自の無限性理解に基づいて論敵に対する批判を行っている。特に1811年の知識学は、無限性をキー・ワードにして展開している。フィヒテによれば、「絶対的有限性の肯定とその否定との総合」としての無限性は、有限なもの無際限な系列、無限進行という形式でこそ確立される。つまりフィヒテはヘーゲルなら悪無限だと見做す無限性の論理構造に、意図的・自覚的に依拠して知識学を展開しているのである。

ヘーゲルの場合では（少なくとも差し当たりは）無限性は「我々にとって」だけのものに過ぎない。それゆえ、無限性を意識の側から如何に提示し得るのかについては検討の余地を残している。イェーナ論理学で悪無限は、真無限の直前という重要な段階に位置づけられているにもかかわらず、悪無限から真無限への内在的進展が明確に示されているとは言い難い。

1811年の知識学でフィヒテは無限性を、自己意識と意識とのそれぞれの側から叙述することを試みている。私見によればこの試みにおいてフィヒテは、意識の主体としての個別的自我のはたらきに即して、無限性を叙述することさえしている。またフィヒテはこの知識学においても、時間を抹消せず保持したままで可能であるような総合を試みている。私は本発表において、ヘーゲルの残した問題点を特にフィヒテの1811年の知識学が示す無限性の概念に照らし合わせながら再検討し、悪無限の意義を明らかにするよう試みたい。

概念の歴史化

——「思想の客観性に対する三つの態度」についての考察——

石川和宣（京都大学）

体系総覧である『エンツュクロペディ』第二版（1827）および第三版（1830）を書き始めるにあたって、ヘーゲルは「論理学」冒頭の「予備概念」において「形而上学」、「経験論および批判哲学」、「直接知」からなる小さな哲学史（いわゆる「思想の客観性に対する三つの態度」）を構想した。これは客観一般に対して思惟する主観が持つ関係という側面から特別に構成された哲学史的考察であり、「本書で論理学に与えられている意義と立場を解明し導出するための詳細な導入」（§25）として位置づけられている。ただしこのアイデアは以前からあったものではない。例えばハイデルベルク期の『エンツュクロペディ』第一版（1817）および同年の『論理学形而上学講義』では「直接知」に相当する契機が記述から抜けており、直接知の立場を代表するとされる思想家のヤコービも（同年の「ヤコービ著作集第三巻書評」とは対照的に）全く冷遇されている。つまり後年に至って、直接知を「カント以後の哲学」として捉え返し「予備概念」へと組み入れることによって始めて、ヘーゲルは「三つの態度」を構成しえたのである。

ではなぜヘーゲルは第一版の構想を変更してまで「三つの態度」を叙述しなければならなかったのか。そもそも、いかなる意味でこの哲学史は体系への「詳細な導入」となり、自身の立場である「客観的思想」の証示となりうるのか。本発表ではこの点を検討することによって、これまで『精神現象学』の問題の背後に隠れがちであった「三つの態度」固有の意義、および「予備概念」が提示する「導入」の独自性について明らかにする。

まず、1831年『論理学講義』において示唆されている「三つの態度」と「論理的なものの三契機」との対応に着目する。講義の記述によれば、「三つの態度」はそれぞれ「形而上学」が「抽象的ないし悟性的側面」に、「経験論ないし批判哲学」が「弁証法的ないし否定的 - 理性的側面」に、「直接知」が「思弁的ないし肯定的 - 理性的側面」に対応するとされている。そうだとすれば、ヘーゲルはここで以前から手許にあった「論理的なものの三契機」に沿って、概念そのものの契機を哲学史記述へ直接的に適用していると考えられる。たしかに哲学史は、純粋な論理的展開の「表象」ないし「アレゴリー」として、「歴史的外面性」において叙述されるというのがヘーゲルの基本的な構えであったはずである。しかし「三つの態度」として切り詰められ、極度に抽象化された哲学史記述が目的とするのは、論理的なものを詳細に展開させるのではなく、むしろ絶対的真理としての概念そのものを歴史記述において表象させることにあったとすることができるのではないか。というのも、論理的なものの三契機がすでに歴史上において実現されているということ、三契機の総体が「表象」され、思惟の対象となりうるということをあらかじめ示すこと、これらのことはヘーゲル自身の学的立場の「正当化」（すなわち導入）となるはずだからである。このような仕方では哲学史記述は体系記述に接合するが、その点において「三つの態度」論は独自の性格と意義を持つと考えられる。

量の基礎づけについて ——数学の観点からの検討——

谷口義治（滋賀県立大学）

『大論理学』（第二版）において、量とは何かという基本的な問題から微積分学の基礎づけにまで及ぶ本格的な議論が展開されている。この報告では基本的な部分に限定して解釈を行い、その意義を数学の観点から検討したい。

『大論理学』の展開をわたしなりに解釈すると、質から量へ至る道筋は向自有を基礎に向一有の外面化によって一と多および反発と牽引へ進み、一と多の弁証法あるいは反発と牽引の弁証法によって量へいくという順序になっている。即ち、大枠としては有の外面化の過程でありそれによる質の止揚である。量は等質性を基礎とすると説明されることがあるが、解釈としては正確でないと思われる。また、外面化による質の止揚として、質に無関心な有となるのだから、量の定義として説明されることもある「質に対する無関心性」は、正確にいうと、量の定義に属するのではなく、外面化によってもたらされるものであり、その結果であろう。『大論理学』の展開ではこのようになっていると思われる。

量の規定に、なぜ反発や牽引がでてこなくてはならないかということについての理由を説明し、またヘーゲルの量概念の特徴がユークリッドによる数の定義やプラトンの一と多の弁証法との対比において一層明瞭になることを示す。

この解釈は古くから議論されてきた数に関する問題のいくつかについてヘーゲルがひとつの答えを与えていることを明らかにする。まず、量や数は弁証法によって成立するということ。さらに数は主観的な概念であるとともに実在性をもつと述べる。従って、数学的な真理は単に形式論理的なものであるだけでなく、外面性における実在の法則でもあることになろう。

ちなみに、現代の数学における自然数の定義はペアノの公理系によるのが基本である。またそれを補うものとして集合概念によるものがある。しかし、具体的な数の概念として正しく自然なものだということには、いずれにも欠点がある。ヘーゲルの量や数の概念規定はたとえ素朴であるとしても自然であり、今日においても、特に初等教育の基礎理論においてもっと評価されねばならないと思う。また、量の分離性と連続性についても、その意義を検討したい。

シンポジウム

テイラーとヘーゲル

提題要旨

チャールズ・テイラーの承認論

——「ヘーゲルからマルクスへ」から「ポスト 9.11 時代における“承認と和解”」にむけて——

中野剛充(千葉大学)

序

ヘーゲルの「承認(Anerkennung, recognition)」概念ほど、世界史に大きな影響力を及ぼした哲学概念は少ない。「ヘーゲルからマルクスへ」という思想史の「大きな物語」とは別の形で、現代における「承認」概念の重要性が復活している。テイラーの思想を検討することを中心に、この問題についての考察を試みたい。

I 「ヘーゲルからマルクスへ」のあとで

ヘーゲルの『精神現象学』:

- ・「承認のための生死を賭けた闘い」と「主人と奴隷の弁証法」

↓

マルクスの共産主義:

- ・「主人と奴隷の弁証法」から、「資本家とプロレタリアート」の「階級闘争」へ。
- ・「疎外された労働」の「止揚」としての「共産主義革命」。
- ・革命による、「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件になるような一つの連合」の構築を目指す共産主義運動が、19世紀後半から20世紀末にかけての人類史を席卷した。
- ・しかし、21世紀初頭の現代においては、一方では世界的な共産主義運動・体制の凋落と、他方では(おそらくそれに伴う)思想史における「ヘーゲルからマルクスへ」を頂点におく物語の「脱中心化」が進んだ。
- ・テイラーも、1970年代のヘーゲル研究においては、「承認」の問題を特別に重視しているわけではなかった(テイラーは、彼が現代における最も重要な問題と見なす、「啓蒙主義的理性主義とロマン主義的表現主義の対立(と和解)の問題」(もちろんここには後に「承認」の問題が深く関係してくるのだが)について、最も早い時期から、そして最も深い考察を展開した人物として、ヘーゲルを解釈する)。

- ・では、現代において、「承認」の問題は瑣末な問題となったのか→NO

II 新しい「承認のための生死を賭けた闘い」

- ・「承認の政治」としての9.11

「(9.11のジハード主義者)はむしろイスラムの価値を肯定すること、何世紀にもわたるユダヤ・キリスト教的西洋に対する屈従の経験を転倒すること、価値を奪われた文明の威厳を復元すること、屈従させてきたものたちを屈従させることで形勢を逆転させることを試みたのです。彼ら、そして彼らが代弁しようとしたアラブ・イスラムの多くの大衆の目から見て問題になっていたのは、「再分配」ではなく「承認」です。」ナンシー・フレイザー『9.11とアメリカの知識人』p.14

- ・ナンシー・フレイザーとアクセル・ホネットの間で議論された、「再分配か承認か」という問題は、9.11以降、生々しい形で現実化することになった。

→やや粗雑なカテゴライズをすると、マルクス主義的な経済決定論と(ロールズの)リベラリズムの「再分配論」を超えた、「アイデンティティ」と「承認」の問題は、むしろグローバルな形でその哲学的な考察が緊急に必要とされているのではないかと考えられる。

Ⅲ テイラーの「承認の政治」

『マルチカルチュラリズム』(1994=1996)を中心として

・現代における「承認の政治」の深刻さ

「…[マイノリティへの]歪められた承認は、適切な尊敬の欠如であるにとどまらない。それは自らを障碍者にしてしまうような自己嫌悪を被害者に押しつけ、深刻な傷を負わせるものである。適切な承認は、我々が人々に与えるべき丁重さにはとどまらない。それは、人間にとって不可欠な必要物なのである。」p.38

・近代独自、そして近代においてこそ緊急に必要とされる概念としての「承認」

「…[近代]以前の社会においては、承認は問題としては現れなかった。社会的な起源を持つアイデンティティは、すべての人が自明視していた社会的範疇にもとづいていたので、一般的な承認がこのアイデンティティのなかに組み込まれていたのである。しかし、内面において生み出される、個人的な、独自のアイデンティティはこうしたアイデンティティをア・プリオリには享受しない。それは交渉を通じて承認を獲得しなければならず、この試みは失敗するかもしれないのである。近代とともに生じたのは、承認の必要ではなく、[承認をめぐる]新しい条件であり、そのもとでは、承認を受ける試みは失敗するかもしれないのである。承認の要求が今はじめて認められているのはこのためである。」p.50

・ルソーとヘーゲルにおける「承認」の問題

「誇りに対する[ルソーの]この新しい批判は、孤独な禁欲ではなく、平等な尊敬をめぐる政治へと導く。ヘーゲルはその主人と奴隷の弁証法のなかでこれを取り上げて有名にした。ヘーゲルは、誇りの害悪についての古い言説に反対して、我々は自らが承認される限りにおいてのみ幸福であることを根本的なこととする。…承認を求める闘争には、満足できる解決は一つしかない。それは対等者間の相互的承認にもとづく秩序である。ヘーゲルはルソーに従って、この秩序を、共通の目的を持った社会、すなわち「私」である「我々」、そして「我々」なる「私」が存在する社会のうちに見出す。」p.69

テイラーによれば、近代のプロジェクトにおいて、ロマン主義的表現主義のモメントは決定的である。ここでは、個人と集団双方における、独自のアイデンティティの「承認」が不可欠である。現代のリベラリズムは、「手続き性」と「中立性」において、個人と集団のアイデンティティとその「承認」に対応しようとするが、それには限界がある、とテイラーは主張する。ロールズとハーバーマス(そしてドゥーオキン、キムリッカ)は公私二元論を維持し、私的領域に限定して文化的差異の承認の問題に対応しようとするが、これほどまで可能なのであろうか？別の形の「抑圧」が潜んでいることはないか？真の意味で他者を「理解」することなく、「承認」は可能なのであろうか？さらに、「相互承認」を通じた「和解(reconciliation)」は現代リベラリズムのモデルで可能なのであろうか？テイラーはこういった問いを投げかける。

おわりに 「承認」と「和解(reconciliation)」にむけて

「承認」と「和解(reconciliation)」は、『自己の源泉』と『世俗の時代』以降の後期テイラー哲学において決定的に重要なテーマである。ここには、ヘーゲル哲学の影響が明らかに存在すると思われる。テイラーは『世俗の時代』において、南アフリカにおける、ネルソン・マンデラやツツ主教らの「真実和解委員会」を一つの「和解」のモデルとして取り上げている。「グローバル・ジャスティス」という言葉に代表される、経済的に公正な「分配」はもちろん不可欠だが、それがすべてではないはずだ。『文明の衝突』(ハンティントン)の破滅を回避する唯一の手段は、グローバルなレベルでの承認と和解にむけた、平和的な、しかし粘り強い対話なのではないか。そしてその問題について、哲学的に考察しようとするとき、われわれはヘーゲル哲学(とテイラーの思想)の新たな可能性を見出すことになるのではないだろうか。

世俗化と近代

——チャールズ・テイラーが見るキリスト教世界——

田中智彦（東京医科歯科大学）

テイラーはときに「ヘーゲル主義者」とみなされてきた。その理由としてはまず、主著の一つが *Hegel* (1975) であることから来るイメージというものがあるだろう。そしてもう一つ、いわゆるリベラル＝コミュニタリアン論争の始まりにおいて、「リベラル＝カント主義者」「コミュニタリアン＝ヘーゲル主義者」という図式が立てられたことを指摘できるかもしれない。

とはいえ、テイラー自身によれば彼は「トクヴィル主義者」であって、「ヘーゲル主義者」というわけではない。実際、1994年に来日した際のインタビュー（『思想』第865号に所収）では、「われわれはヘーゲルの議論をリサイクルし（笑）、再解釈していますが、ある点では乗り越えようがないのです」と語る一方で、当然のことながら「ヘーゲルは、けっしてあらゆる点で正しくはなかった」とも述べている。

ではテイラーがヘーゲルと一線を画すのはどのような点においてなのか。そのことは、テイラーが *Hegel* の後に二つの大著 *Sources of the Self* (1985) と *A Secular Age* (2007) を執筆したこと、しかもそのいずれもが、近代人の自己理解に関する系譜学的な探究であることと無縁ではないように思われる。そこで本提題では、まずはこの問いに回答することによって、テイラーとヘーゲルとの分岐点を確認するところから出発したい。

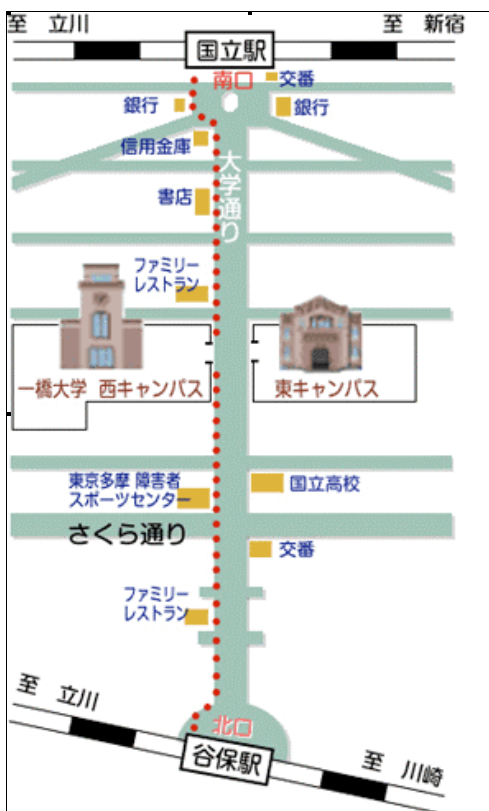
そのうえで本提題が焦点を合わせるのは、テイラーが「世俗化」(secularization) の過程およびその帰結をどのように捉えているのかということである。それが *A Secular Age* の主題でもあることは、そのタイトルからも容易に推測されるだろう。実際にも同書は、いかにしてカトリックのキリスト教世界 (Latin Christendom) が衰退し、今日のように「世俗化された時代」が訪れたのかを、近代人の自己理解の変遷とともに描き出そうとする試みになっている。

その際にテイラーがとる基本的な視点は、彼自身が多くを負っていると語るイリイチのそれ、すなわち、“*corruptio optimi pessima*”（最善のものの墮落は最悪である）という視点と少なからず重なり合っている。またテイラーは同書で、聖書の「善きサマリア人のたとえ話」にたびたび言及する。それは「世俗化された時代」にあつてなお、キリスト教の「最善のもの」を蔵した指針であるとみなされているようにも思われる。

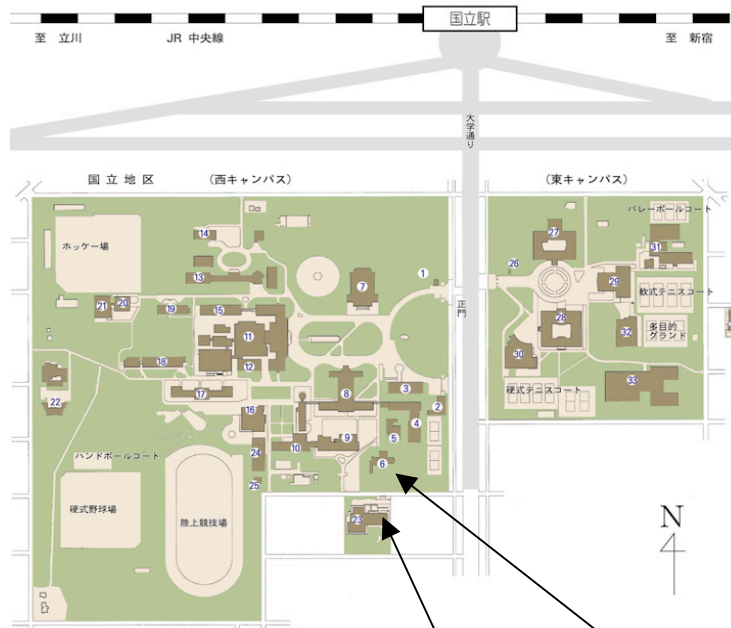
A Secular Age は何分にも800頁を超える大著であるから、今回その全体を詳細に論じるのは難しいであろうが、しかしここに言及した二つの点を取りあげるだけでも、テイラーがキリスト教世界をどのように見ているのか、そこにどのような問題を見出しているのか、その概要をつかむことには資するだろう。そしてそのことはまた、おそらくはテイラーとヘーゲルとの異同をさらに明らかにし、各々の思想への理解を深めることにも資するものと期待される。

一橋大学（国立西キャンパス）までの交通と構内の案内図

交通案内



構内案内



職員集会所（理事会・総会・発表会場）：構内案内図中

⑥

佐野書院（懇親会場）：構内案内図中 ⑳

<http://www.hit-u.ac.jp/guide/campus/kunitachi.html>

<http://www.hit-u.ac.jp/guide/campus/campus/index.html>

〈会場〉一橋大学（国立西キャンパス）

- 理事会：職員集会所食堂
- 発表会場：職員集会所大広間
- 会員控え室：職員集会所食堂
- 懇親会：佐野書院

住所

〒186-8601 東京都国立市中 2-1

交通手段

最寄り駅からの交通

JR 中央線 国立駅 下車

南口 徒歩約 6 分

JR 南武線 谷保駅 下車

北口 徒歩約 20 分

国立駅行 一橋大学下車 バス約 6 分

開催校責任者連絡先

島崎隆

電話：042-580-8295（研究室）

E-mail cs00272@srv.cc.hit-u.ac.jp

住所：〒186-8601 東京都国立市中 2-1

日本ヘーゲル学会事務局

〒352-8501 埼玉県新座市中野 1-9-6

跡見学園女子大学文学部人文学科神山伸弘研究室

電話 048 (478) 4472 (ダイヤルイン)

F A X 048 (478) 3416 (人文学科)

e-mail: hegel@atomi.ac.jp